「ヨブ記講解(12)-霊的な盲目の矛盾」

2022.05.08

説教:イ・スジン牧師
本文:ヨブ記6:5-15

きょうはヨブの高ぶりと霊的な無知、そしてこれによる霊的な盲目の姿について伝えます。

1. 試練は祝福の近道

「野ろばは若草の上で鳴くだろうか。牛は飼葉の上でうなるだろうか。」(ヨブ6:5)
野ろばや牛が食べる物がないので鳴くように、ヨブも妥当な理由があるから訴えている、ということです。すべてを失った上に全身の悪性の腫物で苦しんでいるから、耐え難しい苦しみに勝てなくて嘆いている、ということです。
ヨブの立場では自分がつぶやいて嘆いているのには妥当な理由があると言っていますが、真理に照らしてみれば全く正しくない姿です。私たちが試練に感謝して喜び、祈りで勝利するためには忍耐が必要です(ローマ5:3-4)。忍耐の過程で霊的に成熟するし、鍛えられ、そうするほど天国への希望が大きくなるのです。
神様は私たちの心を練って、肉を捨てて霊に変えられるようにされます(箴言17:3)。試練の過程が、たとえその時は苦しくても、必ずその過程を経てこそ、金のように美しい霊の心になれます。
このように心が霊に変えられれば、たましいに幸いを得ているようにすべての点で幸いを得、健康である祝福が臨むので、試練は祝福であり、希望を生み出す近道なのです。

クリスチャンでもノンクリスチャンでも、誰にでも試練はやって来ます。ただ、世の人は試練がやって来ても防げないし、乗り越えるのに限界がありますが、神様を信じる人々は神様により頼んで乗り越えることができます。また、信仰によって試練に耐え抜く人には祝福があります(ヤコブ1:2-4)。
ところで、信仰がある聖徒の中でも、試練に会ったとき、反応が多様です。しばらく忍耐したのに、あまりにもつらいからあきらめてしまう人がいるかと思えば、忍耐するふり、真理の中で生きているふりをしていて、つい罪を犯してしまう人など、いろいろなタイプがあります。
しかし、神様は「忍耐を完全に働かせなさい」と言われます。神様の前に合格するまで、認められるまで、忍耐しなさいという意味です。そうすると、私たちは何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者になるからです。
何であれ、夢と目標をかなえるためには忍耐と自制が必要です。ヤコブ1章12節に「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」とあります。したがって、神様の前に聖められたと認められる時まで、やって来る試練に耐えてはまた耐えなければなりません。これは、歯をくいしばって無理やり我慢しなさ

いということではなく、真理にあって耐え忍びなさいということです。
　いつも喜んでいて、すべての事に感謝して、絶えず祈っていく人は、どんな苦しみが来ても信仰によって乗り越えることができます（第一テサロニケ5:16-18）。罪によって試練に会ったなら、これを通して自分を発見させてくださるので感謝して、それで罪を捨てて正しい道に行くようにしてくださるので感謝できるのです。罪を犯していないのに試練に会ったならば、祝福を下さるためのものなので、さらに感謝できます。
　ですから、どんな試練に会っても、あれこれ言い訳をしないで、ただみことばに聞き従って喜び、絶えず祈って、感謝して打ち勝ちますように。

2. ヨブの高ぶりと霊的な無知

「味のない物は塩がなくて食べられようか。卵のしろみに味があろうか。私はそんなものに触れるまい。それは私には腐った食物のようだ。」（ヨブ6:6-7）
　ヨブは、塩気のない食べ物や卵の白身がおいしくないように、友だちエリファズの話はまずくて食べられないと言っています。中身もないし価値もない言葉なので、耳を傾ける必要がないと皮肉を言っているのです。
　エリファズは自分なりに神様のみことばを引用してヨブを訓戒しましたが、ヨブはまずい食べ物のようにその言葉を全然受け入れられないのです。ですから「私はそんなものに触れるまい。それは私には腐った食物のようだ。」と言いましたが、これは「おれはおまえより優れている」という高ぶりを表わす言葉です。ヨブは高ぶっていて心の戸を固く閉じていたので、友だちがいくら真理をもって勧めても、これを受け入れて悟れないのです。
　世の知識や学問が信仰を与えるのではなく、まかり間違えば高ぶらせる可能性があることを知っておくべきです。また、みことばを霊の糧とするのではなく、知識としてだけ積むのも同じことです。
　ヨブが真理を本当に知っている人だったならば、高ぶるのではなく、かえって謙虚に低くなっていたでしょう。ですから、友だちと感情的な対立もなかったでしょう。ヨブは潔白で正しく、神様を知っていると思っていましたが、彼の霊的な無知が現れているのです。彼の深い学問が自分を高ぶらせたし、霊的には盲人と変わらなかったのです。

　エリファズも高ぶっているのは同じです。いくら正しいみことばでも、相手が拒否すれば無理に伝えてはいけないのに、エリファズは高ぶっていたので、ヨブを無視して、ヨブが心の戸を閉じているのも知らないまま、続けてヨブをたしなめているのです。

「ああ、私の願いがかなえられ、私の望むものを神が与えてくださるとよいのに。私を砕き、御手を伸ばして私を絶つことが神のおぼしめしであるなら、」（ヨブ6:8-9）
　ここでヨブが願い望んでいるのは死ぬことです。「神様、私のいのちを取ってください」と祈って、その答えを待っているのです。しかし、神様が私たち一人一人をどれほど愛しておられるのかを悟るなら、決してこのようなことを口にすることはできません。
　神様は私たちを愛するがゆえに、この地上で人間耕作をしておられます。人はひょっとして子

どもを見捨てることがあるかもしれませんが、神様は決して私たちを見捨てられません（イザヤ49:15）。死の陰の谷を歩いている時もともにおられるということを覚えていなければなりません。また、人の方では神様を裏切って離れることがあっても、神様は炎のような御目で守り、切ない心でまた帰って来るのを待っておられるということを信じますように。

これは、私たちがまだ罪人であった時にひとり子イエス様をこの地上に遣わして、いのちまで渡す愛を施してくださった、この一つからだけでも悟れるでしょう。神様は、私たちがこの地上で生きていく間に体験するすべての困難を信仰によって勝利して、まことの子どもになるように、いつも応援して、助けておられるのです。そして、美しい天国で神様と永遠に愛を分かち合うその日を、指折り数えて待っておられます。

ですから、私たちはこのような神様の愛に感謝して、食べるにも飲むにも何をするにも、神様に栄光をささげなければなりません。ところが、ヨブは神様の愛と摂理を知らなかったので、自分のいのちを取ってくださるように願っているのですから、どれほどふさわしくない姿でしょうか。

神様を信じると言いながらも、神様にいのちを取ってほしいと祈ることがどれほど信仰のない言葉であり、神様を悲しませる言葉なのか、ヨブは悟れませんでした。真理を正しく知らなかったし、後の世への希望がなかったので、神様の前に不平を言って、神様を悲しめたのです。

3．霊的な盲目の姿

「私はなおも、それに慰めを得、容赦ない苦痛の中でも、こおどりして喜ぼう。私は聖なる方のことばを拒んだことがないからだ。」（ヨブ6:10）

ヨブは、神様が自分のいのちを取って行かれても慰めを得る、と言っています。そして、自分は神様のみことばを拒んだことがないから、神様の前に堂々としていると言います。神様にいのちを取ってくださいと願うことがみことばに背くことなのに、自分はみことばを守っていると錯覚しているのです。

その上、ヨブは全能者である神様は自分に情をかけないで、容赦なく苦痛だけ与えられると思っていました。全能者が厳しいむちを加えたけれど、自分は神様のみことばを拒んだことがなかった、真理を守っていたと訴えているのです。

ヨブは神様の真理のみことばを深く知らなかったので、自分は正しいと思っています。その一方で、自分は真理を守っているので、神様が自分のいのちを取って行かれても思い残すことはないと言っているのです。

このように神様のみことばを正しく悟れなければ、自分が間違っていても、間違いだと悟れません。こうしてわきまえられない状態を霊的な盲目にたとえているのです。

4．霊の信仰の重要性

「私にどんな力があるからといって、私は待たなければならないのか。私にどんな終わりがあるからといって、私は耐え忍ばなければならないのか。私の力は石の力であろうか。私の肉は青銅であろうか。」（ヨブ6:11-12）

ヨブは、もう自分は治る可能性はない、死ぬしかないと思いました。これ以上全能者が自分を

いやしてくださるのを待つのも疲れたし、石や青銅のように丈夫ではないからもう気力が尽きてしまった、と否定的なことを言っているのです。

しかし、これは信仰のない人の限界の中から出てくる言葉です。霊の信仰は無から有を創造します。イエス様は死んで四日になったラザロも生き返らせました。

また、本教会のキム・ウンドク勧士は全身に3度のやけどを負って、生命まで危なかったのですが、堂会長先生の祈りで後遺症一つなく短い間にいやされて、神様に栄光をささげました。このケースはヨブの悪性の腫物よりひどくて絶望的な状況でした。ヨブの悪性の腫物はそれでも細胞は生きていると言えますが、キム・ウンドク勧士は細胞まで死んでしまったからです。しかし、霊の信仰を見せれば、死んだ者も生き返って、死んだ細胞も生き返ります。

ヨブには霊の信仰がなかったので、否定的なことばかり言っています。このようなヨブの姿を通して自分を省みますように。

ほとんどの人は聖霊に満たされていた時は「信じます」と告白して、熱心に祈って、使命を果たして、信仰生活をちゃんとしているように見えます。しかし、いざ試練がやって来れば、今まで積んできた信仰がどれほど真実なのか明らかにされるのです。

マルコの福音書11章24節に「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」とあり、ヤコブ1章6節に「ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。」とあります。

ですから、一度信じて求めたなら、答えを受ける時まで揺るがないで信仰を守らなければなりません。どんな状況でも一度頂いた恵みを忘れないで、真理で心を強くして、天国に行く時まで移り変わらない信仰で走って行かなければなりません。

次の時間に続いて伝えます。